



発行年月日 2018年 3 月 13 日

発行者 日本作業科学研究会広報係

ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

巻頭言

『作業の意味』

吉川ひろみ（日本作業科学研究会会長/県立広島大学保健福祉学部）

作業とは，個人的・社会的に意味のある活動の集まりだという認識は，じわじわとコンセンサスを得られつつあるように思う。「作業が大事」という意見に賛成する人も増えていると思う。しかし，作業を豊かに語り記述することができるかという点，そうでもない。意味のないものは作業ではないので，「意味のある作業」という言い方はおかしいと指摘されることもある。「白い白鳥」と言うようなものである。それでも「意味のある」と強調したい気持ちがわからなくはない。「意味」は有無を問うものではなく，どのような意味かと質を問うべきものだからである。「あなたの作業は何？」という問いに即答できる人に会うことは少ない。私の人生はどんな作業でできているか，その作業の意味は何かと自問する必要がある。作業には一期一会の側面があり，流動的で複雑だ。捉えどころがなく曖昧なのである。

喜怒哀楽の感情を強く呼び起こす作業は，あなたの作業である可能性が高い。その作業を行

うとき，その作業を想像するとき，生きていると実感できるだろうか。過去から未来へのつながりを感じ，周囲の事象をしっかりと見つめることができたなら，あなたはその作業によって存在していることになると思う。

親に決められた通りに，先生の教え通りに，上司に認められるように，友人から仲間はずれにされないように，と行動し続けている人に，作業の意味や価値を説明することは難しい。最近，多くの方は未だ自分の作業に出会うことができているのではないかと思うことが多い。この世に生まれてきたからには，一人でも多くの人が，自分の作業に気づき，出会い，その作業を十分に行ったり考えたりすることができたらいいなと願う。作業には人を育て，社会を変革する力がある。昨年執筆した『『作業』って何だろう 第二版』に，ここ数年考えたことを書いた。

研修会報告

『第5回作業科学にまつわる研究法研修会in長野』

中塚 聡（諏訪共立病院）

昨年5月20、21日の2日間、長野保健医療大学にて、「第5回作業科学にまつわる研究法研修会」が開催され、委員として参加しました。長野県で日本作業科学研究会の研修会が開催されたのはおそらく初めてだと思います。年1回開催の本研修会は、これまで、名古屋、東京、茨城、広島ときて、今回、長野県での開催でしたが、参加者28名のうち、長野県からの参加が最も多く、アクセスしやすい北陸や関東、東海からの参加者を含めると7割を占めていました。又、今回特徴的だったのは、作業科学の初学者の方々が多く参加されたことです。本研修会は研究法の研修会ですが、参加者の関心が研究法だけでなく、作業科学そのものや作業科学の臨床応用にあることがアンケート結果から分かり印象的でした。本研修会は、作業科学を学び始めた方には、作業科学の基礎や歴史を知り、そこから研究に興味をもってもらえる内容の講義があり、研究についての具体的なことを知りたい方には、研究の基礎や作業科学研究の方法論、作業科学論文の読み方、又、博士論文の執筆者から論文

の作成過程の具体的な思考や経験、悩みの報告があり、なかなか他では聞けない内容です。私自身も研修会に参加することで、日々の臨床疑問を研究疑問に置き換える思考や、臨床実践と作業科学の知識や作業療法理論との関係を具体的に考え、ヒントを得る機会となっています。又、1日目の夜の懇親会では、長野県からの参加者同士が意気統合し、県内で作業科学を学ぶ仲間の繋がりをつくり、いつの日か作業科学セミナーを長野県で開催したい、と盛り上がりました。

次回の本研修会の開催地域は現在検討中ですが、作業科学や研究法を学びたいという方々が一人でも多く参加していただけるよう、講師の方々と委員で検討しています。まだ、この研修会に参加したことのない方、また、リピーターの方もお待ちしております。一緒に作業科学や研究について学びましょう。

研修会参加者の 感想

第5回作業科学にまつわる研究法研修会へ参加して

山岸 和正（上伊那生協病院）

2017年5月20日、21日に長野保健医療大学で行われた第5回作業科学にまつわる研究法研修会へ参加しました。近藤知子先生から作業科学の基礎について話を伺いながら、自分が作業療法士として仕事を始めたころ身体機能にだけ関心が向いており、作業療法とは何なのか、自分のやっていることは良いのだろうかと自身の臨

床に自信持てなかった頃、長野県士会主催の研修会で近藤先生から作業科学について講演がありました。その頃の自分にとって全く新しい世界を感じながら、作業療法の「作業」について発見とともに、その後の臨床感が変わるきっかけであったことを思い出しながらの研修会でした。

加えて、今回の研修会では近藤先生から「作業科学とは、作業科学研究文献の読み方」について、酒井ひとみ先生から「研究とは何か」について、青山真美先生から自身の研究論文を元に作業科学研究の進め方について講義があり、その後参加者2名の研究に向けてのワークショップが行われました。

研究を行うには、過程や研究論文を読むための着眼点があることを知りました。研究文献を読み解く上で、研究疑問が適切か、対象者やデータ収集が詳細に記されているか、研究の一貫性があるかなど、批判的視点を持って読むことで、研究文献をより深く読み解くことができると分かり、自身の文献を数多く読んでいないことや読み深めていないことを再自覚しながら勉

強させてもらいました。ワークショップでは、作業療法士以外の方から話題提供があり、作業の概念について作業療法士が持っている概念と一般の方々が持っている概念の違いや、家事をすることを通して回復していく力が示され、作業の機能や意味を考えていく良い機会でした。一般の方々にも分かりやすく「作業」についての啓発を進めていくこと、より良い作業療法を提供できるように長野県内でも学びあえる仲間を増やししながら知識を深めていきたいと思える研修会でした。



第21回作業科学セミナー報告

『未だ興奮冷めやらず』

酒井ひとみ（第21回作業科学セミナー実行委員代表）

まずは、第21回作業科学セミナーにご参集くださいました皆々様に心から感謝申し上げます。多くの不手際や不十分な学習環境など反省は多々ありましたが、参加者の方々の暖かい支え

の中で2日間を終えることができました。利便性を重視して、大阪市内の会場にしたことで、例年より若干参加費を高め設定しましたが、沢山の方にご参集いただきました。有り難いこと

に、当日受付を行うことなしに定員に達する申し込みを頂きました(2日間通しで324名)。これもひとえに、超多忙にもかかわらずご快諾いただきました講師の皆様、海外講師招聘や査読にご協力いただきました日本作業科学研究会理事の皆様、ワークショップ準備にご協力いただきました大阪および滋賀の作業に纏わる勉強会の皆様のおかげです。本大会実行委員を代表して御礼申し上げます。

近畿圏の有志11名が、先人からの申し送りを頼りに約1年前から月1ペースで関西福祉科学大学に集まり、セミナーの準備を始めました。想いがあふれて、「OSカタツムリ」というロゴマークができ、それをモチーフにした記念品まで作ってしまいました。

本セミナーのテーマを、作業科学(以下OS)を「臨床に結び付けるための原点回帰-作業的存在を問いなおす」としました。原点回帰とした理由は、1995年Clark氏による日本で初めてのOSのワークショップで見聞きしたことに端を発しています。OSを身近に意識したのもここからで、いまから22年前ということになります。そこで、OSは、作業療法実践にどのように役立つか? Clarkは、質的研究を用いながらOSを学ぶことで実践へ応用できる要点として、以下の5点を提示しました。

- ①対象者を作業的存在として敬意をもって捉える。
- ②作業を基盤にした介入をする。
- ③良い結果を得るための手段的な作業選択ではなく、その人にとっての目的指向的作業を選択する。
- ④リアルな日常的な生活パターンを活用する。
- ⑤治療的関係性を協働的・作業中心へ変革する。その中の1つである、「クライアントを作業的存在として敬意をもって捉える」を今回取り上げました。作業的存在としてあるべき生活の中にある作業とはどのようなものか、作業的存在としての個人の歴史と人生テーマはなにか、元

来のクライアントの適応の仕方とその選択理由や生じた背景などを並行しつつ捉えることが重要だと考えました。

クライアントを作業的存在として敬意をもって捉えたいので、作業ニードを受け取ってあげれば、自己実現を見据えた目標設定や自分の生活の中だけでなく、社会全体の中で取る行動の探求を加味した目標設定が行いやすくなり、結果、真のリハビリテーションであるリカバリーに辿り着きやすくなると考えるからです。

本セミナーでは、理論と実践を織り交ぜながらもこのテーマに軟着陸できるような筋を通したシナリオに仕立てました。そのシナリオに、最高の人脈と幸運のおかげで、夢のようなプログラムが実現できました。一番待ち遠しかったのはほかならぬ私でした。

なぜなら、このプログラムは、2年越しのプランだったからです。前年に分不相応にも佐藤剛記念講演で作業を受け止める前提としての「作業」療法士の治療的関係性について私見を提示させていただきました。そこで、真のリハビリテーションの実践者を標榜する専門職に求められるリカバリーや社会への包摂の視点、OSの知識を「作業」療法士の治療的関係を実践で体現する例として、オープンダイアログやWRAPを紹介しました。

本セミナーでは、その道の第一人者の講師陣から本当に沢山の感動と示唆を受け取りました。参加者の方々からも高い評価を頂戴し、やっと目標に達したという安堵感でいっぱいです。アンケートによれば6割以上の参加者が初参加ということでしたが、来年もOSセミナーで再会できることを楽しみにしております。

(第21回作業科学セミナー実行委員: 酒井ひとみ・横井賀津志・藤井有里・西村昭宣・木村大介・勢田紘子・稲本尊・大谷将之・渡辺潤・永野元・榊原康仁)

第21回
作業科学
セミナー

・カタツムリ: 作業療法の歩み (Yarxa, 1967)
・楽天的な表情
・リボン: 意思をもって結び続ける誇らしさの象徴



Occupational
Science
&
大阪さとり会
(作業を
取り扱う会)

Occupational
Scienceに後押し
されたカタツ
ムリの通った跡
は虹色に輝く

マグネット



ありがとうございました



佐藤剛記念講演
ボンジェ・ペイター氏



基調講演
サラ・カンターズィス氏



OS基礎講座
吉川ひろみ氏



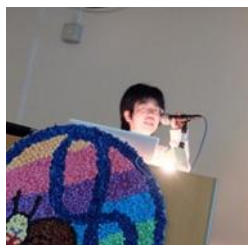
特別講演 森川すいめい氏



招聘講演
増川ねてる氏



口述発表



ポスター発表
フラッシュトーク



ポスター発表

参加者の感想①

第21回作業科学セミナーに参加して

山中 佳苗 (東大阪山路病院)

臨床を通して作業について考える機会が増え、勉強会で作業科学を知り、興味を持つようになりました。そこで今回、第21回 作業科学セミナーに初めて参加しました。

一日目は、佐藤剛記念講演 ポンジェ・ペイター氏、基調講演 サラ・カンターズィス氏のお話を聞きました。両氏の講演を通して、作業の力や集合体(集団)としての作業等について学び、改めて私自身が作業療法士としてクライアントにできることは何か、クライアントの意味のある作業とは何かを考えることが重要であることに気付きました。森川すいめい氏の特別講演では、本人のいないところで本人のことを決めないオープンダイアログについて学びました。演習を通して普段何気なく行っている「話す」「聞く」ということが、相手との関係性やその場の環境の変化によって対応することの難しさを改めて知りました。また、クライアントやそのご家族に寄り添うことの重要性を感じました。

二日目は、当事者経験を持つ増川ねてる氏の招待講演では、“WRAP®”(元気・回復・行動・プラン)についてお話を聞きました。初めて聞

く言葉に興味と戸惑いがありましたが、当事者という貴重な目線からの体験談を交えた内容にとっても引き込まれ“WRAP®”をより学びたいと思いました。吉川ひろみ氏の基礎講座では「作業的存在」について学び、最後のワークショップで、二日間の講演や演習を再確認する時間となりました。実施する上で、パートナーと取り組むことは作業的存在であるための自分を知る機会となり、とても新鮮な気持ちになりました。今回新たな自分を知れたように、クライアントが自分自身を知ることが出来るようにしたいと思いました。

今回のセミナーで作業科学についての重要性を知ることが出来ました。今後、より理解できるように勉強していきたいと思う貴重な2日間となりました。少しでも学んだことを臨床に結び付けることができるように頑張りたいと思います。

参加者の感想②

作業科学セミナーに参加した 作業療法士ではない私の感想

辰巳 渚 (家事塾)

私は、生活に関わる本の執筆と人材育成を仕事としています。大学の地理学科を卒業後、バブル景気の社会でマーケティングの仕事を通して「人が幸せに生きるとはどういうことか」という問いの答えは「日常の生活、すなわち家事という行為の実践にある」と考え、文筆活動に入りました。その後、実践の場を作りたくて「一般社団法人家事塾」を設立、10年間、日常の家事行為への洞察をすることで自己、そして他者

の生き方を整える考え方と手法をもった人材育成をしてきました。

自分の知見の棚卸と次を作るために2015年から大学院に通いはじめたのですが、指導教員から研究手法であるTEA(複線径路等至性アプローチ)を紹介され、TEA研究会で発表したときに、「辰巳さんの関心は、私たちの作業科学の領域と似ている」と声をかけられました。自分の関心を深められる領域は家政学でも社会

学でもない, と悩み, いったん教育学研究科に入ったものの, ずっとどの領域で研究すればいいのだろうと悩んでいた私にとって, このときの「作業科学」という言葉との出会いは, 幸福な巡りあわせであったと感謝しています.

浅学にて, 作業療法については機能回復の方法としてしか認識しておらず作業科学についてはまったく知らず, そのときから本研究会に入会しセミナーや研究会にもなるべく参加するようになりました.

そもそも大学院で学び直そうとした理由は, 自分の得た信念があまりにも社会で理解されないためでした. 弊社のスローガンで言えば「家事は生きること, 家事は人とつながること, 家事は次の世代に手渡す文化」という考え方は, 多くの男性と若い女性には「自分には関係ない」, 子育て世代の女性には「ほんと, 家事ってたいへん」という受け取られ方でした. 人間を経済合理性で捉え, 生産性によってランク付けする近代のものさしでは, 家事はもっとも低い労働, どころか人間性を搾取するものと捉えられます. 家事の社会化, 家事シェアといった流れは, その考え方を促進しています.

この強固なものさしに対して孤軍奮闘しているような気持ちでいた私は, 作業科学の, 人間

を作業的存在と捉えるまなざしを知って感動し, 仲間と活路を見いだした思いだったのです. このまなざしは, 近代からの転換を進める社会に必須のものと思います.

そう考えるとき, 作業科学の課題も考えてしまいます. ひとつは, 作業療法士のあいだに留まっていること. 2016年に作業科学セミナーに初めて参加して, 私は, まわりがほとんどすべて作業療法士であることに戸惑いました. 会話の前提も作業療法の概念にあるような気がして, ひとつひとつ「それはどういう意味?」と確認したいほどでした. 作業科学の伝え方も, 作業療法士に対するものと, そのほかの人や集団に対するものとは, 大きく違うのではないのでしょうか.

もうひとつは, 私が「これこそ求めていたものだ」と感動したように, 作業科学の独自性が人間を作業的存在と捉える視点にあるならば, その独自性をもっと知らしめていってもいいのではないかということ. 私などはAIによって支えられる社会デザインの検討には, 作業科学の視点が必須ではないかと考えます. もし家電メーカーに作業科学の視点があれば, 製品は違ったものになるでしょう. 微力ながら, 私もこの役割を担いたいと考えています.

次回の作業科学セミナーは
東京での開催です!

日程通知です!
この日はOSセミナーのために空けましょう

第22回作業科学セミナー

2018年12月8日(土)・9日(日)
会場: 首都大学東京荒川キャンパス
主催: 日本作業科学研究会

[HTTP://WWW.JSSO.JP](http://www.jssojp)

JSSO

第16回アメリカの作業科学学術会議 (SSO:USA Sixteen Annual Research Conference)
参加報告 (2017年10月19~21日開催)

坂上 真理 (札幌医科大学)

アメリカの作業研究協会 (Society of the Study of Occupation; SSO:USA) では毎年学術集会を開催しており, 2017年は「Participation: People, Places, and Performances」をテーマにワシントン州シアトル市で3日間開かれました。この学術集会の特徴は大学教員や大学院生等の研究者の参加が多いことで, 中には理論研究や現在進行中の研究の発表もあります。2年または3年に1度, カナダ作業科学者協会との合同開催もありますが, 今回はSSO:USAのみが行い, 口述発表38演題, ポスター発表15演題, そしてフォーラムとパネル (1つのテーマに関連した発表の後にディスカッションする形式) が併せて9テーマありました。日本からは5名 (小田原悦子さん, 近藤知子さん, 高島理沙さん, 中嶋克行さん, 坂上真理) が参加し, そのうち4名が演題発表をして来ました。

SSO:USAの発表では, ガン患者やLGBT者の作業経験, 健康をライフコースで発達学的に捉えた学際研究, 作業の視点をういた服薬アドヒアランスの研究, 意味のある作業と結び付くことの効果をバイオメーカーや標準化された評価ツールで測定することを目指した研究など, 研究テーマや研究レベルがかなり多彩である印象を受けました。また, 理論研究では, 作業を説明する概念としての「transformative」や「co-, collaborative-, transecting occupation」の妥当性や定義を問うセッションで, 非常に白熱した議論が展開され, 人々の生活を作業的に説明するための言葉を見つけていく過程の奥深さというか, 重さに胸を衝かれることもありました。

そして, 2017年の最大の特徴は, 何と言っても Ruth Zemke Lectureがなかったことです。この講演は日本の佐藤剛記念講演にあたるもので, SSO:USAでも初めてとのことでした。その代わりに, これまで講師となったJeanne Jackson, Charles Christiansen, Doris Pierceなどの合計6名による豪華なパネルディスカッションが行われ, 作業科学が成熟科学(mature science)になるために行うこと, 焦点をあてるべきこと等が話し合われました。その中で, 成熟科学になるためには, 個人や社会といった視点だけではなく, 文化的にも違う多面的な見方を取り入れながら作業を研究することが重要との話になり, これには東洋の見方に対する大きな期待も含まれています。ディスカッションに参加しながら, 東洋的な見方としてどんなことが発信できるのか…あれこれ思いを巡らしておりました。この他, パネリストからは作業科学と作業療法の関係も話題にのぼり, 「OS→OT」はあるが「OT→OS」が少なく, 今後双方向の結び付きが必要なことや, OSをOT教育のどの段階からどのように教育すべきかななどの問題提起もありました。

刺激をもらってワクワクしたり, 壁の高さに落ち込んだり, 変わらないゼムケ先生にホッとしたりの3日間でした。2018年は, 10月にケンタッキー州で開催され, Ruth Zemke Lectureは『作業科学-作業的存在としての人間の研究』にも執筆しているWendy Wood先生です。



(前列左から Wendy Wood, Ruth Zemke, 小田原悦子, Sheama Krishnagiri, 後列左から 坂上, 高島理沙, Barb Hooper, Megan Chang, 近藤知子, 中嶋克行) (敬称略)

理事議事録

2017年度第2回理事会議事録

2017年12月8日 (金) 19:00~21:00

場所: 大阪リバーサイドホテル 5階D号室

出席: 吉川, 西方, 小田原, 西野 (遅), ボンジェ (遅), 村上, 渡辺, 坂上

欠席: 近藤, 酒井, 齋藤, 堀部

【報告及び検討事項】

I. 各委員会の報告

1. 執行部, 事務局

1) 執行部 (吉川): 日本学術会議に申請予定であったが, 要件を満たさずにできなかった。

2) 事務局 (村上, 坂上)

①会員数, 会計報告: ・210名会費納入して30名未払い。H28年度は約85万収入, 支出約88万。

機関誌, 発送で費用アップのため, 会費の値上げした場合, 3000円で収入と支出がほぼ同じになる。→総会, 年会費の値上げの話をすることを確認する。

②総会進行についての確認: 22回の大会長としてボンジェさんを推薦する。

2. 学術委員会

1) 啓発・国際情報班 (小田原): JOSは23巻と24巻1号の作業が終わった。ISOSで改選あり, イタリアとスペインのOS研究者が役員に加わった。会長がカナダのSusan Forwellになった。

2) 研究推進班 (酒井, 近藤, 渡辺): 今年度は27名参加。次年度は時期は5月上旬~中旬。

3) 実践につなげる班 (渡辺, 西方): 24名参加。次年度は, 4月20, 21日大阪医療専門学校を予定。

4) 機関誌編集班 (近藤, ボンジェ, 西野): 11巻は最終段階の校正を行っている。投稿論文を1つ掲載。投稿論文のチラシも出して募集したが, 11巻は3論文投稿あり。J-stage 担当者

を決めている。12巻のテーマは作業的存在。次年度予算では, J-stageの研修会用に10万円を計上した。オンライン化の後, 紙なしにするかを検討。→まずは, J-stageの作業を行い, その後紙なしにする作業を段階的に実施することを確認。執筆要領の修正中→メール会議にすることを確認。

3. 広報・ネットワーク委員会

1) ホームページ (西方): facebookのリーチ数は数100件。チラシは, 来年のOSセミナー, 実践法研修の日程が決まっているので, 研究法研修の日程が決まったらチラシを作ってアップする。

2) メーリングリスト (西方): Facebookの方が見られている。勉強会, セミナー, 豊富な広報のツールがあった方が良い。

3) 研究会ニュース (村上): 2月1日に次号発刊予定。若い世代の委員も入れていくことを確認。

4. OSセミナー関連

1) 第21回OSセミナー進捗状況

2) 第22回OSセミナーについて (ボンジェ): 会場は首都大学荒川キャンパス。「参加すること, 連携すること」などをテーマにしたい。海外招聘はDebbie Laliberte Rudman。12月8, 9日

4. その他

①予算, 会費について: 会議の旅費は出すことを確認。来年の総会第1号案で会費の値上げと会則の変更を提案することを確認。

2017年度第3回理事会議事録

2017年12月10日 (金) 15:00~16:00

場所: 大阪リバーサイドホテル 5階D号室

出席: 吉川, 酒井, 西方, 小田原, 西野, ボンジェ, 村上, 渡辺, 齋藤, 堀部, 坂上

欠席：近藤

【報告及び検討事項】

- I. 各委員会の報告
1. 執行部, 事務局
- 1) 執行部 (吉川) : 12月8日の理事会の通り.
- 2) 事務局 (村上, 坂上) : ①会員数, 会計報告; 25名追加入金. 5名, 呼びかけに応じなかった.
2. 学術委員会
- 1) 啓発・国際情報班 (小田原) 12月8日の理事会の通り.
- 2) 研究推進班 (酒井, 渡辺) 新潟の方で研究会ができて, 研修の希望があった.
- 3) 実践につなげる班 (渡辺, 西方) 次年度は, 4月21, 22日.
- 4) 機関誌編集班 (ボンジェ, 西野) 11巻は, 規定を変更した内容を入れて発行する.
3. 広報・ネットワーク委員会
- 1) ホームページ (西方) 12月8日の理事会の通り.
- 2) メーリングリスト (西方) 12月8日の理事会の通り. →研究法研修会の日程は, OSセミナーと実践のチラシを作って, 1月にアップすることを確認.
- 3) 研究会ニュース (村上) セミナー報告は酒井大会長に依頼済み.
4. OSセミナー関連
- 1) 第21回OSセミナー進捗状況: トータル350名参加. 場所も良かった.
- 2) 第22回OSセミナーについて: 参加費は今回と同じ. Dr. スタッフンの招聘を検討する. 佐藤剛記念講演は西野歩さんを承認. まんがとアニメの研究者の招聘予定. HPにアップできる情報をアップすることを確認.
- 3) 第23回OSセミナー: 大会長は齋藤さわ子さんを承認. 場所は今後検討する.
- 4) 第24回OSセミナー: 西日本を検討.
5. その他

- ①予算, 会費について: 会費値上げ 規約改正 3000円に. 総会に議題にすることを確認.
- ②役員選挙: 総会で立候補を呼びかけた.
- ③学術会議の申請について: 今回は申請を取りやめた.
- ④次回, 理事会の開催: メール会議の様子をみて, 必要があれば招集する. 委員と役員は年度末~2018年4月ゴールデンウィーク辺りに新たにアナウンスをして, 確認をする.

(ニュース編集担当: 村上典子, 西野歩)